

## パネルディスカッション

(これは学会当日に行なわれた自由討論のテープをもとに編集されたものです。国語の表現は文章語になるよう訂正されておりますが、主旨は変更されておられません。発言された方の名はあげませんでした。また、録音機の調子が悪いこともあって、発言がすべてここに掲載されていない場合がありますが、どうか御容赦下さい。)

近松洋男

司会者：本日は「ロマンス語に特有な語法」という題でパネルディスカッションを行うことになりました。できるだけ多くの方々に自由に発言していただくようお願いいたします。ではまずはじめに口火を切る形で、フランス語に特有な語法をいくつか述べて頂き、それを素材として討論を進めたいと思います。

報告者：フランス語に特有な語法といっても細かな点をあげるときがありませんので、動詞およびその周辺に関する表現に問題をしぼり、恐らくフランス語だけの現象ではないかと思われるものを少し集めてみました。それも歴史的な観点ではなく、むしろ現代の日常の国語を中心にしたいと思います。あくまでもディスカッションのきっかけということで余り学問的なものではありませんが。

動詞というと、まず人称、時制、法、数、語尾があります。フランス語の場合、語尾がかなり磨滅していて、これはラテン語の最終音節の母音が殆んどすべて落ちてしまい、語末の子音が発音されなくなってしまった結果です。直説法現在と半過去に関して、大部分の動詞で単数のすべてと複数3人称、つまり6つの人称のうち4つまでが同じ音を持っているわけです。従って原則として、(1) 人称代名詞の主語が必要ということになります。それに応じて非人称に関しても主語が必要になってきます。はっきり残るのは複数の1人称と2人称に見られますが、複数1人称は、語尾が〔 $\tilde{o}$ 〕となり他の形とはっきり区別されます。(2) 現在の日常国語ではこの *nous* の形を避ける傾向があり、その代わりにラテン語の *homo* から来た *on* という形を使います。(3) *on* という形自体も、他のロマンス語にないのではないかと思えます。「一般に人々は」、という意味を表わす *on*、それから *nous* 「我々は」の代わりに使う *on*、これは二重の意味でフランス語に特有と言えるのではないかと思います。はっきりした語尾を持つ2人称複数 *vous* は普通によく使われますが、(4) この形はいわゆる敬語の単数形としても用いられます。これはフランス語だけとは言えませんが、多くのロマンス語は敬称には3人称を使うので、フランス語に特有な用法に準じるものと言っていいのではないかと思います。

次に動詞の全体的な体系、法とか時制とかは各ロマンス語に共通と言っていいものですが、フランス語に特有のものとして、(5) 単純過去使用の後退があげられます。イタリア語などでも日常国語では単純過去は次第に使われなくなりつつあるようですが、フランス語の場合、この傾向は特に徹底しています。まず話し言葉では全然使われず、代わりに複合過去を用います。書き言葉でも段々そういう傾向にあります。前過去についても同じです。これは直説法の場合ですが、同様のことが接続法にも見られます。(6) 接続法半過去および大過去は次第に使われなくなってきて、その代わりに接続法現在と過去だけ

が用いられ、半過去、大過去は書き言葉でも次第に後退しつつあり、日常口語ではもう使われなくなってきました。つまり、接続法が時制を表わすことがなくなってきました、不定詞と同じく主節動詞との対比でしか時間関係を表わさないということで、動詞体系が少なくとも日常口語に関しては単純化しつつあると言えます。これは先に申しあげたように、*nous* の使用が後退していること、さらに人称語尾が単一化する傾向にあるということと考え合わせて、全体としてフランス語の動詞体系は単純化、簡素化に向っていると思います。接続法の用法も、他のロマンス語に比べて少ないのではないのでしょうか。その一例が、「もし…ならば、…だろう」という条件文の場合にみられます。特に、事実と反する場合、または疑いが強い場合、他のロマンス語では条件節に接続法を使うようですが、フランス語では接続法大過去が書き言葉にやや化石的に残っている程度で、接続法は使われません。(7) 条件節では直説法半過去、大過去が、主節の方では条件法が用いられます。接続法が使われなくなっていることも、あるいは単純化の現象であるのかもしれませんが。

次に動詞の否定形を考えてみます。(8) フランス語の述語動詞の否定には、*ne* と *pas* が必要です。*ne* はラテン語の *non* から来たもので、元来の否定辞で、*pas* はもともと一歩二歩の「歩」で元来は強調に用いられたと思われます。今はむしろ *pas* の方が否定の意味をになっていて、話し言葉では *ne* は無くてもよくなっています。ともかく *ne* と *pas* とを用いることは他には見られないと思います。

疑問文についてですが、平叙文の末尾をあげるとか、倒置をする点は他の言葉にもあると思います。(9) フランス語では平叙文の前に *est-ce que* を付けて疑問文を作ることができます。また、倒置を行なう場合、主語が代名詞の時は普通の倒置をしますが、主語が名詞の場合には主語を受け人称代名詞を動詞の後につけます。この2つの点は他のロマンス語にはみられません。また疑問詞のある疑問文の場合、疑問詞は普通文頭に出ますが、(10) 現代フランス語の日常口語では前にも出ますが後に置いてよいことになっています。「君はどこへ行くか」と言う場合、普通は *Où vas-tu?* ですが、*Tu vas où?* とも言えます。

以上、フランス語に特有だと思われる特徴を動詞を中心に10種あげてみました。

司会者：ありがとうございます。それでは今あげられた10の項目について、他のロマンス語の側からご意見をいただきたいと思います。

☆ *on* はフランス語の特徴ではないと思います。イタリア語とサルジニア語の *si*、そしてスペイン語の *se* もある段階では、フランス語の *on* と全く一緒です。*on* がラテン語の *unus* か *homo* のどちらから来たかについては議論がありますが、フィレンツェでは *noi* と *on* とを同じように使います。標準イタリア語では *lei*, *loro* を用います。これはドイツ語の *Sie* と同じです。これは文法的な問題ではなく、階級制度と文化論の見地からすれば説明がつかます。神話の世界、恐れの世界ですから、三人称の代名詞を使って話かけるわけです。

一方、サルディニア語にもスペイン語にも *usted* があります。これらはラテン語の *vos* から由来したので、フランス語の *vous* に当たります。それから *ne pas* に対して、イタリア語では *non ... affatto* というのがあります。スペイン語で強めに用いる *de nada* は *pas* からそう離れていないと思います。意味論、文法構造、文章構造から考えると、*pas* と *affatto* と *de nada* は同じだと思います。それから、*Où vas-tu?* と *Tu vas où?* とはニュアンスが違うと思います。*Où vas-tu?* は100%の質問で「ど

こへ行きますか」で、*Tu vas où?* は行く場所を聞いているんですけども、これはスペイン語、イタリア語、サルディニア語も同じです。

それから *est-ce que* という表現もフランス語の方が多いが、サルディニア語には全く同じ表現があります。先程フランス語の特徴として述べられたことは、フランス語の特徴というよりも、フランス語の中で生き残っているロマンス語の特徴じゃないかと思います。だから、文法からのアプローチだけでなく社会から出発すればこの現象ももっと解明されると思います。

☆ レト・ロマン語にもいくつかやはり似たような表現があります。フランス語の *on* に当る語は *hom* ないし *om* (発音はいずれも *om*) で、頻繁に使われます。特に会話の中で *om* は *nus* の代りをする傾向があります。それから *ne ... pas* ですが、エンガディン地方では単独の *nu* で、高地・低地を問わず *pas* に相当するもの (*pass*) は固定した否定表現としては殆んど使われません。スルセルバン地方などでは、たとえば先程の文章にも出てきましたが *buc* ないし *buca* として *nun* と平行して使われます。中央の方では *na ... betg* がやはり使われます。

司会者：フランス語だけの特徴と思われていたものにも、他のロマンス語と共通するものがあるようです。では、今までに出てきた項目の他にもまだ類似の語法があれば、それをご指摘いただきたいと思います。

☆ フランス語の *vous* が単数に使われる点については、スペイン語では12世紀の《*El Cid*》において目上の人とか貴族に対して、ラテン語の *vos* に由来する2人称複数形を単数としても使っています。それが後に、むしろ目下の人に対して使われるようになり、それと共に *vos* の形は消失して行きます。しかし、今でも中南米の一部では、その名残として、この *vos* に由来する形を使う現象 (*voseo*) が、ある階級の人達の間に見られます。つぎに否定の表現ですが、フランス語の *ne... pas* は本来は強調の否定がただの否定になったということですが、スペイン語でも *No tengo nada* のように強調の *nada* を付けて強い否定を表わします。しかし補足的に用いられた *pas* が否定詞のメインになってしまったのはやはりフランス語的な特徴ではないかと思います。

☆ *on* が主格から出たか対格から出たかという点はさておき、対格から来たと思われるスペイン語の *hombre* は14世紀からありました。今はまたその語が無くなったとしても、その意味の機能を果たすのは再帰代名詞です。ルーマニア語にも同じ用法があります。フランス語の *vous* は2人称複数であるが単数に用いられる点は、ルーマニア語の *Dumneavoastră* にも見られます。

☆ ポルトガル語について言うと、*se* というのは再帰動詞に用いられます。この場合は勿論 *on* とは違います。フランス語の *On lave des voitures* に対して *Lavam-se carros* と複数が普通ですが、*Onde se pega o bonde?* (「どこで電車に乗られますか」というように単数を使い、これは全く受身です。このように *on* と *se* というのは似ているところもあるけれども、同じだというのは少し飛躍し過ぎだと思います。

☆ ちょっと誤解があったようですが、機能の面を言っておられるのか形態の面を言っておられるのか、混同されているようですが、*on* の役割を *se* も果たしていると言っただけです。また、*usted* の語源ですが、*vuestra merced* の初出例は1436年のコルバッチョの作品にあります。

☆ スペイン語の *no tengo nada* における *nada* は「何も」で、*pas* ではありません。それから *usted*

の語源は、*vuestra merced* と *vos* が交錯したのではないかと思います。

☆ *vuestra merced* はスペイン語には *usted*、カタロニア語には *vostè* が在り、ついでサルディニア語の *bostei*、カンピダノ語の *bostelli*、リオン地方の語に *vostè* が出ています。*si* と直接法半過去と条件文の問題ですが、スペイン語の *si tuviese dinero, lo compraría* のような文中の接続法や可能法の代りに、非公式な口語では *Si temía dinero, lo compraba* と条件節にも帰結節にも直説法半過去が使われているケースがあります。また、*nada* は *res nata* に由来するが、例えば、*eso no es nada bueno* の如く副詞として機能している場合だと案外 *pas* に近似していると考えうるのではないのでしょうか。それからフランス語の *on* についてですが、スペイン語では *uno, una* が非人称形で使用される動詞の不定主語として、*En un caso como éste no sabría uno a qué atenerse* というように使われます。一般的には再帰の形で *no se sabría, se vende, se compra eso* などとなります。

☆ 事実と反する仮定は、イタリア語でも話し言葉では直接法の半過去、そして帰結節にも半過去を使えます。それからルーマニア語にもその傾向があったと思います。イタリア語の *non... affatto* は「全く…ない」という強詞の意味で使われることが多いと思いますが、もう少し透明な感じの *non... mica* が使われることがあります。この場合、*mica* だけを用いて、*mica faccio* と *faccio mica* とも言います。

☆ スペイン語の *nada* と *de nada* は全然違うのは承知していますが、フランス語の *ne... pas* の *pas* に相当するのはむしろ *nada* だと思います。フランス語の特徴として *ne... pas* をあげられたのは妥当だと思います。一般に、フランス語は語形が磨滅して音節数が少なくなったため、冠詞などが頻繁に使われるのだと言われています。否定語の *ne* も、一音節あるのかないのか分からない長さなので、どうしても *pas* が必要になるのではないのでしょうか。フランス語にはそういう表現が一杯あるのではないのでしょうか。たとえばスペイン語で主語を省いて、前後関係とか語尾変化で主語が分かる場合には、動詞だけで表現しますが、フランス語の *être* の 3 人称単数形に相当する形を、スペイン語なら動詞 *es* だけで表わすところをフランス語では *c'est* とするのもその 1 例で、短い語形を 2 つ合わせてよく使っています。*ne... pas* はそのフランス語的特徴の現われの 1 つとして捉えれば理解できるのではないのでしょうか。

☆ イタリア語では、従属節の中で接続法を使うとされる場合、そこに直説法を使った場合にどういう違いがあるのか。どちらでも同じような場合には直説法を使った方がよいのではないかという意見も多いのです。一方、教養ある人は「接続法をちゃんと使うんだ」という意識で、接続法を用いるとされる接続詞の後では接続法を使う場合が圧倒的に多いのが現状です。

条件文については先程も出ましたように、条件文にも帰結文にも直説法の半過去を、過去の事実と反する仮定に対する帰結には接続法大過去を条件法過去の代りに使うのが一般的です。この場合、文頭にある *se* でかろうじて意味が通じるということです。インペルフェットの概念であるから、過去における未完了、不完全な過去であるという概念から、*se* が前におかれた場合には実際には果たされなかった、行なわれなかった事実という概念は十分に残されます。義務とか可能とか欲求を示す動詞の場合にのみ、英語の *can, may, must* とかに当る動詞に関しては *se* がなくても、直接法半過去で条件法過去の代用を完全にしていて条件法過去は殆んど見当りません。

それから先程、*non... affatto* と *non... mica* の否定の強調のことが出ましたが、これも良しとするのと間違いとする 2 つの意見があります。ただ *mica* はミラノにかなり強く残っていて、ミラノ方言で書

かれた現代小説で、non が全く出てこないのもあるぐらいです。場所は、響きの感じで前でも後でも可能な感じです。

司会者：今までのところ、はじめにあげられた10の特徴をめぐって色々やりとりがあったわけですが、このへんで他の特徴も考えてみたいと思います。それぞれのロマンス語の立場から他と比べてみたい特有語法がありましたらどうか自由にご発言下さい。

☆ フランス語は否定疑問に対して肯定で答える時に oui の代りに si を使う。これがあるかどうか。また列を作っている人にあなたは何番目にいるのかという疑問、第何番目という疑問は他のロマンス語で出来るか。それから副詞+名詞、こういう表現があるかどうか、それからたとえば beaucoup de という表現がありますか。

☆ 何番目というのはルーマニア語にあり、al cîtelea ...? と言います。否定疑問に対して答える特別の形は Ba da です。beaucoup de というのはルーマニア語では o multime de、スペイン語では un montón de と言います。

☆ 叙法の不定法、つまり et lui de venir とか、et Jean de venir とか言う言い方は他のロマンス語ではいかがでしょうか。

☆ イタリア語では、de でなく a になりますが、文章構造としては一緒です。

☆ on にあたる言葉がドイツ語では man、フランス語では on ですね。語源としては同じ意味ですが、si dice とか、この si はやはり sic から来たのですか。イスパニア語にも同じような表現があると思うんですが、イタリア語ほどは知らないものですから、いかがですか。

☆ si は sic からだけでなく、ipsi から来たとすればおかしくないと思います。ipsi から考えたら代名詞です。

☆ スペイン語では「一般に人が…する」という時の se の語源は明らかにラテン語の SĒ です。

☆ これは内外漢の意見ですが、イタリア語の si dice の si も同じ語源から出たものが音変化によって se から si に移行したのではないかと思うのですが、<sup>\*</sup>いかがでしょうか。私自身は、スペイン語の se は(そしてイタリア語の si も)本来再帰代名詞で、その用法が特殊化して、ある場合に、「一般に人が…する」という意味も含むようになったものだと思います。今でも、この se が文の主語かどうかについてよく議論されますが、私はこれを非人称文の表示ということで理解しています。

〔\*イタリア語の si が音変化によって SĒ > si になったと発言したのは誤り。これはラテン語の SIBI (SIBI > SĪ > si) に由来する。(発言者註)〕

☆ その si ではなくて接続詞の si の中でなぜ未来形が使われないのでしょうか。Wagner によると、(写本の読み違いかも知れませんが)フランス語にはいくつかあります。他のロマン語ではいかがですか。

☆ フランス語では接続詞 quand の後に動詞が条件法であるか接続法であるかによって、quand の意味が違ってきますが、他はどうでしょう。

☆ イタリア語の quando は、時間も条件も表わします。

☆ 副詞の très が若干の動詞の複合動詞を作るために使われます。他の言語はどうでしょう。それから念を押す場合に用いる n'est-ce pas はフランス語的だと思います。

☆ ポルトガル語では、n'est-ce pas に相当する Não è? というのがあり、ブラジルでは短かくなって日本語の「ね」と同じようになります。

☆ スペイン語では ¿no? ですね。¿(no es)verdad? というのもあります。

司会者：他にもまだこれはどうだろうかという新しい事柄がありましたらお願いします。

☆ 文法用語について半過去という訳語はあまり適当じゃないのではないかというのが私の考えです。高津春繁さんもそうおっしゃっていました。ところが広辞苑の新版において、風間喜代三さんや三宅徳嘉さんはやっぱり半過去という言葉は認めておられるんです。ですからそれでいいかどうか皆さんに考えていただいて、将来こういう機会に御意見をうけたまわりたいのです。それからドイツ語やその他の文法で、条件法というのは適当ではなく過去における未来といった方がいいという意見を述べているフランス語学者がいました。ロマンス語については出来るだけ申し合わせて適当な訳語を選ぶほうがいいんじゃないでしょうか。半過去というのもポルトガル語をやったキリシタン語学者からずっと蘭学系統を伝えて来ているのでしょうか。明治以降になって作られた術語じゃないようですね。このへんで新しく検討しながら適切な訳語を作ったらどうでしょうか。

☆ 私もずっと半過去を使わないで「かっこの中の現在」というのを使っています。

司会者：用語についての大きな問題を指摘していただきました。これはいずれまた討論の題材としてとり上げられることになると思います。もう一度話を特有語法に戻しまして、他にまだ何か新しい問題点がありましたらどうぞお話し下さい。

☆ 虚辞の ne について、フランス語の方ではたとえば「…する以前に」avant que のあとでは消える傾向にあります。しかし比較の対象になる文章には ne を使わないといけないうので消えてはおりませんが、他の言語ではいかがでしょうか。

☆ スペイン語の Hasta que no venga Juan に no が入っている。この no は虚辞と呼ばれます。フランス語の虚辞は本当に虚辞ですか。

☆ それは確かに否定ですね。「彼女は昔そうであったより今はきれいだ」という場合、「昔はきれいじゃなかった、今はきれい」という意味です。しかし英語ではそうは言わない。他の言語では言わないのにロマンス語で言うとするれば、ある意味では虚辞と言えます。全く発想が違うといえばそうですが、非常によく似た構文が問題であることは否定できません。

☆ 経済性を考えれば虚辞なんて使う必要はありません。だから表面的に虚と観察しているけれど、言語を話している人達にとっては一つの何かのマーカーになっている可能性があります。個人的には、「虚辞」は最後まで使いたくないと思っている。先程出てきたスペイン語の se も、虚辞と言われる先生方もおられるかもしれません。

☆ スペイン語で「彼に何か悪いことが起ったのではないかと心配だ」Temo que le haya ocurrido nada malo という場合、「何も悪いことが起っていない」という願望・期待を込めて、話者の方で否定形にすることがある。また、No me voy hasta que no me paguen のような形で虚辞の no が用いられます。

☆ 合わせて、フランス語では二重否定という形式があります。Nul homme n'est bon 他の言語ではどうでしょうか。

☆ 今ちょっと思いついたのですが、他の言語で可能かどうかお伺いしたいのですが、所有の形容詞を être に当る動詞のあとで用いる構文はあるでしょうか。

☆ スペイン語では、es su とは言いません。

☆ レト・ロマンでは谷によっていろいろ違います、ラディン語には2つあった記憶があります。たとえば、「この帽子は誰のもですか」[Da chi es quist chapè?] という問いに対して「私のです」と答える場合、Que es mieu. と Que es il mieu. とも言うことができます。

☆ 先程の beaucoup de の形ですが、スペイン語では一般に muchos, muchas となり、構造上似た表現に un montón de, una peste de, una plaga de など他にも多数指摘できるが、一方、ついであるが un peu de は un poco de という形になり、方言又は俗語のレベルでは una poca de agua のように後続の名詞と性の一致が起こり女性形になる場合もあります。

司会者：段々スムーズになりかけたところで、残念ながら時間が来てしまいました。様々な問題点に対して、それぞれのご専門の立場から数多くのご意見をいただきました。これをうまくとりまとめるのは私の能力の遠く及ぶところではありませんのでご迷惑をお掛けしたところもあるかと思えます。が多くの方々に肩のこらない雰囲気の中で討論に参加していただいたことは、初めての試みとして大変意義のあることだったと思います。どうもありがとうございました。

報告者紙上追加発言：報告者がフランス語の特有語法としてあげた10項目のうち、いくつかについて、他のロマンス語にも同じ語法があるとの指摘を頂きました。しかし同じ語法と言っても使用レベルが異なるのではないかと思われる場合があるようです。一例をあげると、ne... pas はフランス語では標準的な否定表現で、初級文法の授業では、否定形は動詞を ne と pas ではさむと必ず教えます。イタリア語やスペイン語の初級文法では標準否定形は non... affatto, non... mica, no... nada などと表わすとは教えない筈です。ある語法が標準的なものなのか、特別なもの(強調的表現・俗語・文語・古語・方言など)なのかを必ずしも明らかにされないままに討論が進められたように思います。

フランス語の10項目のうち、おそらく10(やゝ俗語的)をのぞいては標準的なもので、報告者の発言自体その点に関してあまり明確ではなかったと反省しています。

#### 司会者紙上追加発言

このような催しは初めての試みですので、司会者としては参加の方々に自由に発言していただくよう何よりも心掛けたつもりです。そしてこの目的は十二分に果されたものと思います。しかし反面やゝ討論の刈り込みが足りないままに経過してしまいましたのは、一つには上にご指摘いただきましたように使用レベルの区別が混乱したままであったこと、そしてもう一つは、歴史的観点を離れたところから出発したはずなのに、いつのまにかある言語の現在の特有語法と別の言語の過去の歴史的な事実が同じ平面对比されるようになってしまったこと、またそうならざるをえない場合もあったこと、によるものと思われる。これらの点が整理できれば、より稔りの多い討論になったことと思います。